本の修復作業を経験して

山村　仁朗

二〇〇四年は世界的に災害の多い年であった。京都大学もその例外ではなかった。人環・総人図書館の水道管破裂である。人環・総人図書館地下書庫が浸水し，書庫の蔵書・資料が水を被った—私がその知らせを聞いたのは十二月二四日のことである。何とも刺激の強い Christmas present であった。

水に浸かった蔵書を最初に見たとき，その量の多さに驚いた。図書館二階の大閲覧室に移された蔵書は全てを大閲覧室の机の上に並べることができず，床の一部にも並べてあった。また，壁一面に地図などの資料が掛けられていた。その後数日間私は友人たちと水に浸かった蔵書の修復作業の手伝いをすることになった。具体的な作業内容は本の濡れた頁と頁の間に水を吸い取るための紙を挟み込む，また水を吸収しきった紙を新しい紙と交換する，それを只管繰り返すというものであった。

さてこの作業を実際行なってみて，私が当初予想もしていなかったことについて二つ簡単に触れておきたい。一つは作業場の寒さである。水に濡れた本に黴が繁殖する恐れがあるため，大閲覧室で暖房なしという劣悪の環境で作業は行われた。風は吹かないにしても，大閲覧室の広さであるから外の気温と差がない。皆上着を着ての作業となった。もう一つは蔵書の取り扱いである。何しろ人環・総人図書館の書庫であるから，“年代物”の蔵書が多い。水を被ったものの中にもそうしたものがあった。特に製本をしていない雑誌の取り扱いには苦労した。普通の状態でも触れただけで崩れてしまいそうなものがある。今回の場合，水に浸かっているわけであるから表紙を開こうとしただけで破れてしまいそうなものがたくさんあった。また，紙を多く挟みすぎると本の形が変形してしまう恐れのあるものもあった。そのようなデリケートなものを扱うのであるが，先述のとおり暖房が使えず指先が思うように動かないのである。この作業はそういった面で大変苦労した。

とは言いつつも，作業は友人たちといっしょであるため終始楽しく円滑に行われた。また不謹慎ではあるが，私にとって今回水に浸かった図書・雑誌・資料は一生出会うことのなかったであろうものばかりであるから，それらと出会うことのできた貴重な体験だったと思う。京都大学の二〇〇四年を締めくくる大事件であった。（二〇〇四年一月三〇日）

（やまむら　よしあき，大学院人間・環境学研究科）